

私の英語経歴書

中野秀治

小学校2年に大阪に移るまで、ほとんどの期間を金沢で過ごした。物心ついた頃は、まだアメリカの進駐軍が居て、軍用のトラックやジープが市内を走っていた。体格も顔付きも違う兵士達を身近に見中るうちに、日本語以外の言語、つまり外国語というものがあることがわかった。未知の言語へのあこがれのようなものがその頃芽生えたようだ。しかし、その「外国語」とは英語だけだと勝手に思い込んでいた。つまり、英語さえできれば、世界中の人と話ができると思ったのだ。しかし後になって、「外国語」には英語以外に、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、・・・いくつもあることがわかって愕然とした。これでは、いくら英語を覚えても世界中の人と意思の疎通をするのは無理ではないかと。

小学校4年でローマ字を習った。何でもローマ字で書くと、英語を書いている気分になって嬉しかった。アルファベットは表音文字であり、1文字ずつ速く発音すれば、英語の発音になると思い込んでいたが、後でそうではないとわかって愕然とした。

小学校5年になると、母の指示に従い、近所の教会で牧師が先生をしている英語塾に通い始めた。母は同年代の多くの人がそうだったように、十分な教育を受けられなかったので、子供の教育には熱心だった。英語塾の先生はアルゼンチンから来たようで、発音は英米人とは少し違っていた。例えば、rの音は強くて、tigerは「タイゲル」といった具合だ。1年程通い、中学1年程度の英語は理解できるようになっていた。

中学校では英語の授業が多少退屈だったが、発音はイギリス式で、塾で習ったのと違い戸惑った。そこで発音を重点的に勉強しようと思い、英単語はスペルと発音記号も覚えるようにした。正しい発音はできなくても、発音の筆記試験はいつも満点だった。

高校になると、英語は受験英語に一変した。「赤尾の豆単」、「山貞の新々英文解釈」・・・、この辺で英語嫌いになる人はさらに増えると思う。私も受験英語の勉強は楽しくなかったが、何とか持ちこたえた。

大学は工学部だったので、英語については専門書の原書を申し訳程度に読むくらいだった。一方、これからの時代は英会話ぐらいはできた方がいいと考え、ECCの英会話学校に入ろうと思った。しかし授業料が年約5万円の一括先払いであり、貧乏学生にはおいそれと出せる額ではなく、入学をあきらめた。

社会人になって数年経ったころ、森本哲郎の「ゆたかさへの旅」に触発され、インド旅行を思い立った。これが初めての海外旅行だった。団体旅行なので、いろんな年代の人が参加していた。あるお婆さんが両替をしてもらうのに、**"Small change, please."**と言ってちゃんと意思表示できたのに、難しい受験英語をこなしてきたはずの自分は、こんな簡単なことも言えず愕然とした。そこで帰国後すぐにECCへ入学手続きに行った。授業料は値上がりしていて、年約10万円だったが、最も可処分所得の多い時期だったので支払いに問題はなかった。しかしレッスンのある週2回は、残業せずに大急ぎで帰宅し、夕食もそこそこに夜出掛けていくのは億劫だった。それが2年間続けられたのは、クラスメートの若い女性たちに会える楽しみがあったからかも知れない。レッスンでは毎回暗唱させられたが、後で思えば、英語のリズムや語順、流れを体得するのに役立ったようだ。

その後、アメリカに3年間駐在することになるが、詳しくはOSTECジャーナル第13号に掲載されているので、ここでは割愛する。

帰国後、かな漢字変換ソフトウェア（Wnnという名称で、今でも一部の携帯電話に搭載されているらしい）の開発に関わったので、日本語文

法について改めて勉強し、英語と共に言語への興味が深まった。

その後、新規事業の模索のため、専門学校で教員として出向することになった。情報技術関連の科目が担当だったが、技術英語の授業もさせてもらった。専門学校の先生方とはたまにカラオケに行くことがあったが、英語担当の先生は皆、歌が上手だった。音に対する感受性と英語力とは相関関係があるのかも知れない。

出向が終わって本社に戻ると、社員向け研修の企画・運営部門の所属になった。たまたま技術英語の講師に空きがあったので、それも担当することになった。人に教えることは、むしろ自分にとって非常に勉強になることがわかった。

次の所属はマニュアル制作部門だった。日本語のマニュアルを翻訳会社で英訳してもらい、日本語通りに訳されているかどうかをチェックする担当だった。なかなか根気の要る仕事だったが、だんだんと自分でも翻訳できそうな気がしてきて、誤訳しても実害の少ないものや、外部に出せない事業計画書などは自分で翻訳するようになっていった。翻訳の仕事は実に楽しく、給料をもらうのが悪いような気さえした。

ここまで来れば、会社を辞めた後も翻訳の仕事をしているのは必然のようだが、進駐軍との出会いに始まり、その後様々な偶然が重なった結果だと思えば不思議な気がする。翻訳の勉強はいくらやってもこれで終わりということはなく、一生の勉強テーマを与えられたようだ。